



Special Feature
Slow Living City

Chapter 5

鼎談

「住みごたえ」のあるまちをつくるために

撮影／喜多章



大阪くらしの今昔館館長

谷直樹

エッセイスト

麻生圭子

CEL所長

木全吉彦

「大阪市立住まいのミュージアム 大阪くらしの今昔館」にて

そのまちに住むことが楽しいと思える「住みごたえ」のあるまちとは、どのようなところなのでしょう。 「大阪くらしの今昔館」館長を務め、大阪市内で長屋の保存・再生に取り組む谷直樹氏、京都の町家で美しい生活を楽しむ麻生圭子氏、CEL所長木全吉彦が自らの体験を語りながら、住みやすく魅力的なまちとスローとの関係を語り合います。

「まちに住まう」ことを 体感できる 博物館

木全 本日お邪魔している、「大阪市立住まいのミュージアム 大阪くらしの今昔館」は、「まちに住まう知恵をつなぐ」というコンセプトでつくられているようですが、近世大阪のまち並みが細部にわたって再現されているのに驚きます。特に一日や四季の変化が体験でき、時間との関わりが重視されているように感じますが、設立の背景はどのようなものだったのでしょうか。 谷 館がオープンしたのは2001年ですが、博物館をつくらうという企画を始めたのはその10年前です。そのさらに2年前に『まちに住まう——大阪都市住宅史』（平凡社）という本を大阪市の住宅政策課と一緒に編集・刊行したのですが、そのころは、都市居住というのあまりメジャーなことではありませんでした。1973年のお正

月に「住宅すごろく」というのが朝日新聞に掲載されたんですが、そのころの上がりは「庭付き郊外一戸建て住宅」になっていました。太陽と自然の恵みのなかで住むというのが理想でした。1980年代あたりの大阪市内も住む場所というよりは通ってくる場所という感覚でした。しかし、歴史を掘り起こしていくと、まちにとって「住む」というキーワードがいかに大きいかかわかってきました。ひとが住んでこそ、まちの魅力が高まるということが見えてきた。それで、『まちに住まう』を企画した頃から、まちの再生のキーワードは「住む」なのではないかと思うようになりました。昔はまちが汚いって言われただけで、あれは、住んでいないからなんです。まちを「使う場所」としてしか見ていないから。木全 「住む」という要素がなくなっていくことで、まちがずさんでいくわけですね。 谷 そういうことです。本を出した次の段階として、皆さんにもまちに「住

「ひとが住んでこそ、まちの魅力が高まる」

Tani Naoki

たに・なおき／建築史・居住文化史研究者。1948年、兵庫県生まれ。京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。大阪市立大学名誉教授。現在、大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）館長。同館の企画と運営で日本建築学会賞、大阪市北区豊崎における長屋スポットの保全・再生プロジェクトで日本建築学会教育賞、グッドデザイン・サステナブル賞などを受賞。著書に『まちに住まう』（共著）、『町に住まう知恵』『いきている長屋』（編著）などがある。

スローは、 ゆっくり暮らす ことではない

「む」ことの重要性を体感していただくうと思つて、博物館をつくったんです。頭で理解するだけではなくて、体で感じる場所が欲しいなと。大阪は、戦災や戦後の再開で、昔ながらの建物がほとんど消滅してしまっている。そこで、博物館をつくって、大阪のまちの原点を子ども頃から体験し、まちへの愛着や、どういふものを引き継いでいったらいいのかということを理解してもらおうと思いました。木全 体で感じるとおっしゃいましたが、この博物館の特徴として、説明書きが少ないということがあると思えます。自分で考えながら回って、発見があるのも楽しいですね。 谷 おじいちゃんやおばあちゃん、孫と来ると、昔の自分の体験や知識をしゃべることができるから、いい格好もできるんですよ（笑）。ここは年配のボランティアさんも多いです。歴史や伝統を背負いながら、新しい都市をつくっていくのが「スローなまちづくり」だとすれば、この博物館はスローライフの原点としての雰囲気醸し出しているのではないかと、自負しています。



ながら実践されているわけですから、ご自身と建物やまちとの関わりの中にも、今回のテーマであるスローの核心のようなものが含まれていると思われませんか？

麻生 スローライフを実践しているというのと、なんだかとてもゆっくり暮らしているように思われるのですが、「ていねいに暮らす」ということは、時間をかけて、ひとつのことをするわけですから、おのずと忙しくなるんですね。それをやっている人間の動作は早くないと、成り立ちません。自慢してしましますが(笑)、私、手先が器用というのもあって、なんでも手早いんですよ。うちはエアコンもないんですね。だから暖房はストーブと火鉢。冬の朝は、炭を熾すところからはじまります。でもね、自分で作った暖房ですから、あつたかさも一入。心がほっこりする。夏、打ち水をして、起きる風の心地よさは、扇風機とは全然、違います。バタバタと忙しくしているけれど、それを味わうときの時間は、誰よりゆっくり流れている。季節も同じですね。京都は夏暑くて、冬寒い。でも冬、堪えたあとだから、春の訪れの喜びがある。秋もそうです。そのメリハリが暮らしを美しいものにしてくれる、本当に贅沢とはなにかを教えてくださいませんか。

木全 便利な暮らしというのはよく言いますけれども、「ていねいに暮らす」という言葉はいいですね。それは手間をかけるということになると思うので、ぜひなら、帰ってもおもしろいことがないからです。家に帰ったら寝るだけです。文化的なことは、家の中でもない。そういう学生が、築90年の長屋を再生しようというプロジェクトに参加することになった。普通だったらそういうプロジェクトは専門家ややるわけですね。でもわれわれのプロジェクトでは、学生が自分で設計して改修してみようということをやりました。**木全** 梅田から10分ほど、都心のご真ん中に、見事に長屋が再生されていますね。

谷 家ってこんなに大事に住むものなんだというカルチャーショックが、彼らにはものすごく大きかった。居住環境学科(大阪市立大学生活科学部)の学生だから、本来知ってなければいけないことなんだけれども……。これからは、新築ではなく、既存のものを住みこなしていく仕組みが、さらに大事になってくると思います。伝えられてきたものには、歴史の知恵が詰まっているわけです。それを今の感覚で少し新しくすることが大切じゃないかと思えますね。伝統的な家というのは、きっと「住みごたえ」があるんだと思うんです。

麻生 そうそう、暮らす手ごたえがあるんですよ。**谷** ええ。そういうものを醸し出している家が、値打ちのある家だと思えます。特に豊崎長屋は、学生たちが自分で住めるように再生したという思いが、ものすごく詰まっている。これからの

すが、そのあとに幸せがあるから楽しいのではありませんか。

麻生 その過程そのものも、私は楽しんでいような気がします。暮らすということが趣味なんです。私、スポーツジムで体を鍛えている人たちが、不思議でたまらないんですよ。どこが楽しいんだろうと。そのあとの結果が出るからなんですよ。だって、私は家の中で雑巾がけて、体を動かしているほうがいい。庭掃除をしているほうがいい。季節のうつろいや、陽射しのうつろいを肌で感じることもできるから。でもここだけの話、最近は少し慣れてきちゃいました。前は、なんでこうなるのということばかりで、大変なことうれいことも、なにかも新鮮だったんです。

木全 学びのプロセスというのは、最初は知らなかったことをやってみて、できた、ああうれい、次はこれもやってみよう、という具合に進んでいきますね。だから、だいたいわかっていると、もうそれ以上新しいものが入ってこなくなると、おもしろくなくなってしまうという現象が生まれる。人間って常に刺激がないとなかなか継続することが難しいと思うんですが、スローライフって刺激の少ない暮らし方なのじゃないか、と思う方もいらっしゃると思うんです。

麻生 ただ、ある程度わかると、今度はそれをどのように自分流にアレンジしていくかということに、楽しみが移るんじゃないでしょうか。最初は全部社会では、きちんと家の面倒を見るというシステムを、どこかで保証していることが大事だと思います。それをもっと教育していかないとけない。そうすると、家に愛着がわきます。そうなれば、家に定着する。そして、近所に目がだんだん広がっていく。そうすると、まちにコミュニティができていくんですよ。

麻生 それは女のひとだけではなくて男もしなきゃいけない。そうすると家に愛着がわく。そうすると……浮気をしなくなる(笑)。

谷 マンションだと隣近所との付き合いはほとんどなくて、お金だけ出して管理してもらおうというところがあるけれども、自分の目を使いながら管理するということはとても大事だなと思えますね。

麻生 その長屋ってお祭りみたいなものはあるんですか？

谷 かつては地藏盆があったんですが、子どもがいなくなっただけです。それで、数年前から「長屋路地アートフェスティバル」というのを始めたら、近所の子どもが来てくれた。そういうときに、学生の役割ってものすごく大きいですよ。年寄りがやっても子どもは来ない。でも学生が浴衣を着てやっていると、子どもたちが寄ってくる。そういう仕掛けも大事だと思います。

麻生 隣近所との付き合いがある程度しておかないと困る町家の場合には、お祭りって大事で、新旧の住人が一堂に会す機会なんです。新しくこんなひ

京都流にやってみよう。でも、便利なものも使いたい。じゃあ、ここでは機械を取り入れよう、ここは自分でやってみようというふうには、自分のなかで自分のリズムをつくれるようになるわけです。

木全 茶道や武道などにおける「守破離」の世界ですね。

住まいに心をかける

麻生 住まいに対しても、もう少し心をかけるといふ気持ちをもった方がいんじゃないかと思えますね。一番大切な家族と暮らす「家」というものをいつくしむ、いとおしむという気持ちが大変だと思います。今の日本人は、豊だつたり柱だつたりに目をかけることがすごく少なくなっているように感じます。

木全 谷先生は、この近くにある、現存する本物の長屋(豊崎長屋)を、大学のプロジェクトとして保存・再生なさいました。そこには若い方々が住んでいるのですが、そういった若い方の様子というのは、ご覧になっていかがですか。

谷 彼らも、今まで便利な暮らしをしてきているわけです。でも、それになんとなく疑問をもっています。学生はワンルームマンションに住んでいます。夜、6時、7時には帰らない。な

「四季のメリハリが、本当の贅沢とはなにかを教えてください」

Aso Keiko

あそう・けいこ/エッセイスト。1957年、大阪府日田市生まれ、東京育ち。80年代、作詞家として、徳永英明、吉川晃司、小泉今日子などの多くのヒット曲を手がける。進行性の難聴のため、91年に作詞家を休業。96年から京都在住。国の登録有形文化財の町家で、昔ながらの暮らしを営む。主な著書に「東京育ちの京都案内」「東京育ちの京都探訪(文春文庫)」「京都がくれた「小さな生活」」(集英社b.e文庫)、最新刊は「京都早起き案内」(PHP新書)。



谷直樹氏と大阪市立大学の教員・学生たちが再生に取り組む、大阪市北区の豊崎長屋。

るまちになるという感覚はおありですか？

麻生 古いものをどうやって守っていいかわからないというの、大都市はどこでも抱えている問題ですよ。町家を店舗にするのは、本来からすれば違うんだけど、京都の場合には、それもよしとしなければ、すぐにビルなり駐車場になってしまうので、それもよしかなと思っています。

木全 局所的な対応だけでは、まちな体を豊かにできないですね。ひととまちとの交わりがもう少し豊かになると、まちへの愛着も生まれてくるのではないかと思っています。家の中というのはもちろん憩える場所なんです、まちというサイズで捉えたときに、わがまちにはこんな憩える場所があつて、だから好きなんだということがきつとあると思うんです。ヨーロッパで私が好きなのは、まちの中心部に広場や公園があるところ。ロンドンのトラファルガー広場では、若い男の子2人が本を見ながらチョークで地面に国旗を描いていて、それを見た観光客が自分の国の国旗のところにお金を置いていく。それだけでも、いい光景ですよ。

麻生 歩道とか公園とか、みんなの場所なんだから、規制するだけではなく楽しめる場所にすれば、もっとコミュニティケーションを取れる場になると思います。

木全 歩道のわきに自転車専用レーンが設けられるケースが増えてきました。ヨーロッパでは、ひとが歩く場所

と自転車が通る場所が、両方十分に確保されていて羨ましいですね。日本でも最近、自転車が増えていますが、歩行者が危険にさらされている。やっぱり「歩けるまち」というのはとても大事だと思っています。普段から歩く生活をしていくというのは、健康にもいいですし、健脚でさえあれば、年をとってもまちを楽しめると思います。

まち並みの 伝統を 受け継ぐこと

谷 まちづくりもまさにそうだと思いますよ。そういう心の交流が上手に生まれる状態がつかれると、活性化していく。リーダーだけが目立っているようなプロジェクトが、今はまだ多い気がします。

木全 企業のマネジメントと同じように、ボランティア・マネジメント、あるいはやる気マネジメントみたいなものをつくらなきゃいけないですね。

谷 例えば、昔の京都では、そういう仕組みがあつたと思います。そのひとに訊いたらなんでも知ってるけれど、自分の手は下さないという長老がいる。その下の世代が実務を一所懸命やっている。そのさらに下の世代がのちのたにいろいろな見て学んでいる。そういうシステムのなかでは、長老は、とても尊敬されているわけです。そういうものを、現代風にもう一度見なおして、風通しよくやるという方法もあるかな

と自転車が通る場所が、両方十分に確保されていて羨ましいですね。日本でも最近、自転車が増えていますが、歩行者が危険にさらされている。やっぱり「歩けるまち」というのはとても大事だと思っています。普段から歩く生活をしていくというのは、健康にもいいですし、健脚でさえあれば、年をとってもまちを楽しめると思います。

麻生 歩く速度で見える景色というのは、乗りものからはなかなか見えない。昔、京都を歩いていたときに、市役所近くでしたが、路地の奥でおいさんが小さな女の子を行水させているのを目にしました。京都って、こんなに都心部で子どもが行水できるようなスペースがあるんだと感心したんです。公道ではない、でも家の中でもない、あいまいな内でもなく外でもないスペースがあるんだと思う、うらやましいなど。そういう場所があるとまちが豊かになるんじゃないかと、ふと思いました。

スローな暮らしを まちへと 広げる

木全 パブリックなものが少なくなりすぎると、まちの住みよさがなかなか上がっていかないように思います。しかし、公共工事はお金がかかりますし、そのあと維持するのも大変です。そこで、「スローな暮らし」を家の中からもうちょっと外へ広げて、まちの中に

と。地藏盆なんかもまさにそうなんです。でも、1回つぶれてしまうと、復活させるのはなかなか難しい。

麻生 やり方がわからなくなってしまうんです。伝達していく、受け継いでいくということは本当に大変なんだなと思います。

谷 そういうことが社会的に成熟していくと、隣を見ながら歩調を合わせる、といったことが出てくると思うんです。家を建て替えるにしても、今は、自分のところがきちんと主張できれば、隣の家のことなんかどうでもいい、といったことが強いですよ。だけど、京都のまち並みがきれいなのは、隣の家を見ながら、あまり突出しないように、という気持ちをもって、各人が家を立てていたからだと思うんです。ヨーロッパもそうだと思います。日本では、ある意味一からつくり直さなければいけないところにまで来てしまっているわけですが。

木全 ヨーロッパ的なまちの文化というのは、日本では育たなかったのかもしれないですね。ヨーロッパの城塞都市の場合、ひとつひとつのまちが小さな国のようになっていて、市の壁の中でコミュニティが形成され、成熟していったのだらうと思います。一方、日本では、時代とともに外から人が流入して霜降り状になってまちがどんどんふくらんでいく。だから、日本の場合にはゾーンとしての旧市街というのがない。**谷** ひとつは、日本の家が木造だったという問題があります。もうひとつは

あるものもみんな維持しようという動きになれば、維持費も安くなって、うまくいくのではないのでしょうか。道路や公園の清掃も、業者に頼むんじゃないと、地域のひとが少しずつ力を出しあつて自分たちですれば、コストはかからないです。

麻生 清里なんかでは、やっつるようですよ。

木全 「やらされてる」と思うような状態ではだめで、それをするのが楽しいというふうには、だれかがオーガナイズできればいいのと思うのですが。**谷** 今、団塊の世代がちょうど定年後の時期なんです。今昔館でもボランティアを募集すると、団塊の世代がたくさん応募してきます。ただ、団塊の世代って理屈っぽいですから(笑)、個別活動は強いけれど、みんなでなにかをやるうとするときに、議論が百出して空中分解するということが多いんです。なにかをやらなければという気持ちはあるんだけど、なんのためにするんだというのを、けっこう議論するんですよ。そういうグループを、どういうふうにするの、育て上げるか。それに応答するような仕掛けが大事になってくると思います。例えば、お仕着せのボランティアじゃなくて、しかも評価もちゃんとされるとか。今昔館で言えば、ここに来て着物の着付け体験をしてくれるのは韓国や台湾のひとが多い。この着付けには、たくさんボランティアさんが参加しています。それだけではなく、裏方では浴衣の洗

戦災。でも、ヨーロッパの場合には、ワルシャワのように戦争で消滅しても同じようにつくり直しているまちもあります。

麻生 日本では、神社なども、式年遷宮で、わざと一回新しいものを白木でつくり直します。日本人って、「見えない」伝統は受け継いでいくけれど、「見える」建物を守ろうという意識はそんなにないのかもしれない。

谷 ヨーロッパは地続きじゃないですか。だから、まち並みが民族のアイデンティティと不可分なんです。日本の場合は、そこにあまり気づかない。ワルシャワの旧市街を再現することにしても、民族としての誇りがものすごくあると思いますよ。

木全 私自身は、年をとるに従ってそういうものの価値がわかってきたような気がします。若いときは、新しいもの、未来を向いているものに、どうしても関心が向くんですね。

麻生 でも、今の若い子の一部は、われわれが若かったときよりも古いものを異文化のように捉えているので、おもしろいとか、かっこいいかと思ってるひとも多いです。そういう子たちに託していったらいいんじゃないかと思うことがあります。

谷 グローバル化が進むと、一方でローカルも進むんですね。今の若者たちは、ヨーロッパも見ているし、もう西洋に対する過度のあこがれもない。彼らにも期待していきたいですね。

「ひととまちとの交わりが 豊かになると、 まちへの愛着も生まれる」

Kimata Yoshihiko

きたた・よしひこ／大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長。1955年、愛知県生まれ。大阪ガス入社後、営業部門でマーケティング・リサーチ、企画部門で組織改革を担当。ロンドン事務所所長、エネルギー・技術研究所副所長、東京支社長、コンプライアンス部長などを経て、2011年より現職。

